

ダンテ

神曲
新生



野上素一訳

世界文学大系 6

ダンテ



世界文学大系

昭和37年10月30日発行

訳者	野上素一
発行者	古田晁
印刷者	山元正宜
発行所	株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291)局 7651

目次

神曲

地獄篇

浄罪篇

天堂篇

新生

ダンテの魂

解説

年譜

野上素一訳

5

103

201

野上素一訳

300

G・パ
池田ビ
ー
廉訳ニ

345

野上素一

354

363

装
幀
庫
田
發

ダ

ン

テ

神 曲

地 獄 篇

第一歌

全篇の序章——暗闇の森——森からの脱出——飲茶
山と三匹の野獣——信頼できる案内者のヴィルジリ
オ——大旅行の始まり。

私たちの人生行路のなかば頃
正しい道をふみはずした私は
一つの暗闇の森のなかにいた。

ああ、それを話すのはなんとむずかしいことか
人手が入ったことのないひどく荒れた森のさまは
思いだすだに恐怖が胸に蘇えってくるようだ。
その森の難渋なことはほとんど死にも近い。

だが私は彼地で享けた幸運を述べるため、
そこで見た他のことをも話すことにしよう。

いかにしてそこへ迷いこんだかうまいいえないが、
ただ、正しい道を捨てたその頃の私が
深い眠りにおちいつていたことは確かである。

そのうちに私はとある一つの丘のふもとへついた。
その丘は私の心を恐怖でくすめた

あの渓谷の終点をなしていたのである。

私は目をあげて丘の肩をながめたが、

そこはすでに他の人の道案内をする
太陽の光をうけて輝いていた。

そのとき私の恐怖はややすこししずまった。
それは夜の間じゅう心の洞にとどまって

私をたいそう苦しめていたものであった。
だが息もたえだえに大海をのがれて

岸にたどりついた人が危険な水をふり返り
じつと眺めるときのように、

まだ逃走を願っている私の心は
生きたままでは何人をも通さない

あの森のほうをふり返ってみていた。
疲れたからだをしばらく休めたあとで

私は人気がない丘の斜面を歩きだしたが、
確かな足は常に低いほうの足であった。

だが、ようやく急坂にさしかかったとき
一匹の軽快で、すばらしく敏捷な豹が

班紋のある毛皮でおおわれて
私の面前に現われ、立ち去ろうとせず

立ちふさがって私の前進をひどくじやました。
そこで私は引き返そうとして幾度もふり向いた。

(2)

第一歌

(1) 三十五歳。その理由は「詩篇」
九〇の一〇に「われらが年を経るは七
十歳に過ぎず」とあり『聖宴』四の二
三および二四に人間の最盛期は三十五
歳とあるから。したがってダンテが彼
岸旅行へ出発した年は一三〇〇年の復
活祭の聖金曜日(三月二十五日から四月
五日)の前夜と推定される。

(2) ダンテ個人の倫理生活の破綻と
懷疑、人間社会一般の倫理的・社会的
秩序の混乱。

(3) 理性の象徴であるヴィルジリ
オ(ウェルギリウス)に会って救済の道
へ進んだこと。

(4) 靈魂の眠りの中世では罪の証拠
と考えられていた。

(5) 原文では *Planeta* 遊星という
文字を用いている。

(6) 中世の医学では心臓のなかに洞
があつて血が貯えられていたと考えた。

(7) 諸説あるが斜面を登るときを描
写。

(8) 人間肉欲の象徴。

(9) 万物創造のとき太陽は白羊宮と
ともに、春に創られたといわれるから。

(10) 天使、その仕事の一つは天体運
行だった。

(11) 被造物、ここでは天体。

(12) 人間傲慢の象徴。

(13) 人間貪欲の象徴。

(14) 上述の暗闇の森。
(15) 上述の暗闇の森、倫理的に低い
ところという意味ももっている。

(16) ダンテはヴィルジリオが辺獄で
長い間沈黙して暮らしていたと想像し
たのである。

(17) ヴィルジリオ(ウェルギリウス)
すなわち有名なラテン詩人(前七〇—
一九年)ダンテが彼岸の世界に道案内

(7)

(7)

(2)

時刻はまだ早朝だったのだ

太陽はあの聖なる愛がはじめて

その美しいものを動かしはじめた時すでに

いっしょだった星を伴って昇っていた。

だが時刻もよく季節もよかったのだ

目もあやな毛皮をまとった獣が現れたとて

希望をすてなかったのは自然のことだった、

だが恐怖を感じなかったのも一匹の獅子が

出現するまでのことであつた。

獅子は私に向かってくるように見えた。

そして頭を高くあげ、猛々しい飢餓のため

大気まで恐れさせているように見えた。

すると一匹の牝狼が現れたが、

それは食欲を瘦せこけたからだにこめ

多くの人の暮しを苦しめているようだった。

その獣が見る者に与える恐怖のために

私ははなはだ思い悩んだあげく

ついに丘の頂上をきわめる望みを捨てた。

望んでいたものを手にいれた貪欲者が

得たものを失う時になると、思いのすべてを

こめて悲しむものだが、安息を人に与えない

この獣に会った時の私の気持も同様であつた。

牝狼はだんだん私に迫ってきた

私を太陽の沈黙するところのほうへおし戻した。

私がまさに低い場所へ落ちこもうとしたとき、

長い沈黙のために声が細くなっていると

思われる者が、目の前に姿を現わした。

私がその者をひろい人気ない場所にみつけると

大声で叫んだ、「私に憐れみをかけてください

あなたは影か真実の人間かどちらですか」

彼は答えた、「人間ではない人間だったものだ。

両親はロンバルディアの者だったし、

ふたりとも生れはマントヴァだった。

私はユリオの晩年に生まれて

善良なアウグストの御代に

虚偽と虚言者の時代にローマに住まった。

私は詩人だったが、驕る城イリオンの

落城の後でトロイアからやってきたアンキーズの

嫡子のことをうたったこともある。

だが、きみはなぜふたたび苦悩の場所へ戻るのだ。

どうしてすべての喜びの源である

歓楽山へ登ろうとはしないのだ」

「それでは、あなたは末は豊かな言葉の河を

ひろげている水源ともいうべきヴィルジリオですか」

と私は面はゆい気持で答えた。

「おお、あなたは他の詩人たちの名誉と

栄光なのです、ご著述をながらく研究し

深い尊敬を払っている私を助けてください。

あなたは私の先生で、また私の愛好する作家です。

私の名前を有名にした美しい文体は、

あなただけから学びとったものです。

私が思わず背を向けたあの野獣を見てください。

有名な賢者よ、私をあの獣から救ってください。

あいづは私の血管と脈を震えあがらせますから」

「きみは別の道をとらねばいけないね」

私が涙ぐむのを見て彼は答えた、「もしきみが

この恐ろしい場所からのがれようと思うなら。

というのは、きみに思わず叫び声をたてさせた

としてこの詩人を登場させたのは、主

として彼の「アエネイス」の中に彼岸

旅行の叙述があったためであり、また

中世ではヴィルジリオは実際彼岸旅行

をした一種の魔法使だとの考えが一般

に普及していたためである。

(18) 現在のロンバルディアよりも、

もっと広い意味で使用され、北伊一帯

を指した。

(19) 北伊ヴェローナとボローニャの

中間にある、イタリヤの古都。

(20) 原文では *sub Ilio* とあるが、

ヴィルジリオはジュリオ・チェーザレ

(ユリウス・カエサル) におくれるこ

と二十九年、その晩年に生まれたことを

しめすのである。

(21) ローマ皇帝アウグストゥス・オ

クタウィアヌス(前六三―後一四年)。

(22) トロイア戦争で有名なトロイア

の町は小アジアの海岸にあった。ト

ロイア戦争はその王プリアモスの子パ

リスが、スパルタ王メネラオスのもと

に客人として滞在中、王妃ヘレネに恋

をして、彼女を奪って帰国したために、

それを奪還せんとして攻めてきたギリ

シア軍との間に十年にわたって起こっ

た戦争。

(23) アエネアスのこと。彼はアンキ

ーズ(アンキーズ)とアプロディテの

間に生まれ、トロイア戦争の時はトロ

イア方の名將だったが、落城後各地を

漂泊した後にイタリヤへついてトル

ヌスを殺してローマ建國の基礎をつ

つたといわれる。

(24) 浄罪山とも呼ばれ、浄罪界はこ

の山の上にある。ダンテが登りかけた

丘はそれのふもとだったのである。

(25) 原文で野獣が単数になっている

のは、三四のうちでもっとも恐ろし

い牝狼を指したからである。

あの獣は他人がその道を通るのを許さず、それを妨げて殺してしまうからだ。

また性質も非常に邪悪で罪深く飽くことのない貪欲を満足させたことはかつてなく、

ものを食べると前よりいっそう飢餓を感じるのだ。(一六)

その獣は多くの獣と交尾して種族をふやしつつにヴェルトロが現われてそれを苦しめて

殺してしまうまで繁殖をつづけるだろう。

ヴェルトロは土地も金銭も食べず

知恵と愛と徳を糧とし、その人民は

フェルトロとフェルトロのあいだに栄えるであろう。

そして、そのため処女カミル^(一七)は死に、

エウリア^(一八)ロ、トウルノ、ニーゾが傷ついた

屈辱のイタリア^(一九)はついに救われるであろう。

ヴェルトロはまた狼をあらゆる町から狩りだし

それをふたたび地獄へ追いこむであろう。

嫉妬が初めてそれを誘いだしたその場所へ。

私はきみのために策をねり解決の手段を見つけたから

従いてき給え、私が案内者になつてあげよう。

きみをここから永劫の場所へつれていくことにしよう。

そこではきみは絶望の叫びをきくだろうし、

悲歎にくれる昔の霊を見るであろう、

彼らはみな第二の死を歎き悲んでいるのだ。

また火中であつて満足している者も見るとであろう。

それは、いつのことかわからぬが至福の人の群に入る希望をもっているからなのだ。

きみがそこからさらに高い所へ行くことを望み

私よりもいっそう高貴な霊さへ来てくれるなら、

私はその霊にきみを托して立ち去るとしよう。

(一六)

(一七)

というのはその国を治めている主権者は私がその国の法律にそむいたからといってその国に入るのを許さないからだ。

主権者は全地域を統括し、治めており、

そこにはその者の都市と高い座があるのだ。

そこに選ばれて住むものは幸福である」

それで私は彼にいった、「詩人よ、あなたのご存じなかつた神の御名にかけてお願いします。

この悪い場所とさらにもつと悪い場所とを

のがれるためあなたのような場所へつれていってください。

聖ピエトロの門とあなたの話された場所にいる

まことに悲惨な者たちを見ることができるよう」

そこで彼は歩きはじめ、私はそのあとに従った。(一八)

(一八)

(一九)

(26) ダンテの使用した謎の言葉の一つ。通常の意味は異夫だが、注釈者たちは、それがクリスト、教皇、皇帝、ルチエンブルクの王アリゴ第七世、カンランデ・デラ・スカラなどを暗示するものだと説く。

(27) 北イタリアの近隣の地名。ローニヤ地方の山の名だとの説のほかには天を意味し、この箇所は天と天の間と解すべきだという説もある。

(28) 『エネイス』七の一に現われるゾルスの王女。

(29) 『エネイス』九、一二に現われるトロイア方の勇士。

(30) 兩人とも右に同じ。

(31) 低部イタリア地方のと解す人もある。

(32) 悪魔が人間に嫉妬を教え、それによって地獄から狼がでてきた。

(33) 地獄。

(34) 地獄界など彼岸の世界。

(35) 肉体の死のことを第一の死と呼び、死後の霊魂の苛責をこのように呼んだのである。

(36) 浄罪界にいる魂の状態をいったもの。

(37) ペアトリーチェ。

(38) 今いる暗闇の森のそば。

(39) 地獄。

(40) 浄罪界の門。その門の鍵はクリストが、聖ピエトロに渡した(「マテオ章」一六・一九)またさらに聖ピエトロはそれを天使にあずけて保管させている(浄罪篇第九歌一七行以下)。

第二歌

地獄界の序章——ダンテの逡巡——ヴィルジリオの
激励——ダンテの元氣回復——ダンテの旅行を援助
する天の三人の淑女。

一日は暮れてゆき、大気は暗色となり
地上の動物を勞苦から解放した。
私はただひとりこれからはじめようとする
旅行と哀憐に堪えるための心の準備を
していたが、誤りをおかさない記憶は、
それを諸君へ伝えるであらう。
おお、ムーゼよ、高い叡智よ助けてください、
おお、記憶よ、見たことを覚えておき給え、
そうすればきみの高貴性は明白になるのだから。
私は話しはじめた、「案内者の詩人よ、
危険な旅行で私をためすまに、
私の能力をよく考えてみてください。
シルヴィオの親は五官をそなえた現し身のまま
永劫の世界を旅行したと
あなたは書いておられますが、
一切の悪の敵であるお方が、
彼にしみした好意は後代におよんで彼から
偉人や偉業がうまれ出たのと思ひ合わすなら
適切なことであつたと、賢い人なら誰でも
わかるはずです、彼こそローマ帝国の父として

(一)

エンピレオにえらばれた人だったからです。
さて、この都と帝国こそはまったくの
偉大なピエトロの後継者の座として
聖なる場所とさだめられたものなのです。
アエネアスは、あなたが書かれた
彼の旅行の道すがら、自分の勝利や教会成立の
理由をきき知ることができました。
その後『選ばれた器』もそこへいつて
信仰の確証を得、帰ってから
救済の道のあるきはじめたのです。
だが、私はなぜいくのです、誰が許したのですか。
私はアエネアスでもバオロでもありません。
それはどの価値があるとは、私も他人も、
思っていません。もし私が旅行を承諾すれば、
無考えなことをしたといわれるのが心配です。
賢いあなたは私がいう以上におわかりでしょう。
私は望んでいたものをもはや望まず、
気がかわって、初志をひるがえし、
やりかけたことを断念した人みたい、
ちょうどそんな氣持で暗い斜面にたえずでいた。
私は初めには、あんなに早く決心した初志を
思い悩んだすえ失ってしまつたのである。
「もしも私がきみの言葉を正しく理解したのなら」
と寛大なその影は答えた。
「きみの魂は怯懦にとりつかれているのだ。
それはしばしば人間のじやまをし、
幻覚によつて、ものの影を獣と見あやまらせ、
誉れある計画からそれさせてしまうことがある。
その恐怖からきみを解き放つため

(二)

第二歌

- (1) アエネアス。アエネアスはラウ
ニアとの間に男子シルヴィオ(シル
ウィウス)をもうけたからである。
『アエネイス』第六巻にはアエネアス
が現身のまま、彼岸の世界を訪問した
ことが記されている。
- (2) 神。
- (3) ローマ帝国皇帝や帝国の建国の
事業。
- (4) 至高天。ダンテは『アエネイス』
をキリスト教的に解した。それゆえこ
こでエンピレオというのは、ローマ帝
国の意味。また *Empireo* と *Impero*
(ローマ帝国)を語呂合せのように並
べたものと解せられる。
- (5) 教皇のこと。ピエトロとは初代
のローマ教皇聖ピエトロ。
- (6) 彼岸の世界旅行。
- (7) 聖バオロのこと。「使徒行録」
九の一五に「この人、異邦人、王たち、
イスラエルの子孫のまににわが名を持
ち行くわが選びの器なり」とある。
- (8) 歓楽山の暗い斜面。
- (9) ヴィルジリオ。

(三)

(七)

私はここにきた理由とときみにはじめて憐れみを感じた時聞いたことを話してみよう。

私が中間的存在者にまじっていたところ、

私がみずから奉仕を買ってでたほど恩寵にみちた一人の美しい婦人が私を呼んだ。

その目は星にもましてつよく輝き、

天使のような声で、しとやかに、また

静かに私に告げたのだ、

『おお、マントヴァのやさしい魂よ、

あなたの名声はまだこの世に続いています、

世界が続くかぎり、それは絶えないでしょう。

運命に恵まれなかった私の友人が

荒れた山路の斜面で前進をばまれ

恐怖のためにあと戻りしようとしています。

その人はすでに久しく道に迷っています。

私が天で聞いたところによると、

救助が遅すぎたのではないかと気づかれます。

あなたの雄弁をもって急いでいってください。

彼を救うためにあらゆる手段をつくしてください。

彼を救って私を安心させてください。

あなたに行くことを命じる私はベアトリーチェです。

私はいま帰ろうとしているところからきました。

愛が私を動かし、私に語らせているのです。

私が主の御前にでたときに

あなたのことをほめておきましょう』

こういつて口を閉じたので、私はいったのだ、

『おお、有徳な婦人よ、ただあなたのおかげでこそ

人類は最小の闇をもつ天のなかの

すべてのものに優越しているのです。

あなたのご命令はよろこんでお受けします。

だがそれをおこなったとて手遅れかもしれません。

ご意向はもうこれ以上お明かしになりませんように。

ただ私にはうかがいたいことが一つあります。

それは一刻も早くお帰りになりたい広い場所から、

この世界の中心へお下りになった理由です』

『それほどまでご存じになりたいなら、

なぜここへ下るのを恐れぬかを手短かに、

お話ししましょう』と彼女は答えた、

『恐れるということは他を害する力があるもの

だけに向かつてすればよいので、害を加える

力のないものには必要がありません。

私は神さまのお恵みで、神さまにより、

あなた方の不幸を感じないのと同じく、

この炎も私には触れぬようにされているのです。

天におわします優しい婦人は、そのため、

私があなただを遣わそうとするあの者がはばまれて

いるのに同情され、天のかたい審判をゆるめられました。

その婦人はルチアをよんで命じました、

『おまえに忠実な者がおまえに救いを求めている、

私も彼のことをおまえに一任する』と。

そこで一切の残酷なものの敵なるルチアは

たちあがって年寄のラケル⁽¹⁰⁾といっしよに、

私のいたところへ来て、いいました、

『神の栄光の証明なるベアトリーチェよ、

おまえを慕い、おまえのために凡庸詩人の群を

抜きんじた者をなぜ教に行かないのです。

彼が歎き悲しむ声が聞こえないのですか。

海などよりも恐ろしい急流のなかで

(10) 原語では Color che son ag^o 22. 中間に吊られている者であるが、

その意味は祝福された仲間でもなく、

罪人として地獄で罰せられている仲間でも

ないということである。Limbo 辺

獄の住人はみなそのようなのである。

(11) ベアトリーチェ。

(12) ヴイルジリオ。

(13) ダンテ。

(14) 至高天。

(15) ベアトリーチェ。

(16) 月天のこと。月は最小の圏をも

つ天であった。当時の考えでは地球は

月天に属していた。

(17) 至高天。

(18) 地球は諸天の中心にあると考え

られていたが、地獄はまた地球の中心

であった。

(19) 辺獄の火の炎。

(20) 聖母マリア。

(21) 牝狼に前進を妨げられている。

(22) 憐れみの聖女聖ルチア。

(23) 旧約聖書のジャコベ(ヤコブ)

の妻で瞑想生活の象徴。

彼が格闘している「死」をみないのですか」
 その言葉をきくや否や、あなたの名声と、
 あなたの読者をたかめるあなたの高貴な
 作品に信頼をおき、悪を去って善にむこう者の
 中でも私ほど速い者は世界にないほどの速さで、
 あの恵まれた座を去って、
 ここへ下ってきたのです』

こういうと彼女は涙で輝く目を

そむけました。それにより、私は早く

出発するようにうながされたのです。

(17)

かくして私は彼女の望みによって来たのです。

そして美しい山の細道を登るのをじやました

あの野獸からきみを救ったのです。それなのに、

どうして佇んでゐるのです。なぜ、なぜ、

なぜ、そんな怯懦を胸にいだくのです。

なぜ、勇敢で率直になれないのです。

天の宮殿では三人の実力のある婦人が、

きみのことを心配しておられるのですよ。

また私の言葉もきみの救済を保証したはずですよ」(18)

ちょうど夜の寒さに頭をたれ花弁を閉じて

いた小さな花が、陽が白くかがやかすとき

茎のうえに姿勢をただして花ひらくように

私のくじけた力もかくのごとくになった。

すると善へ赴きたい勇気が胸にわきおこり

怯懦から解き放された者のように口をひらいた。

「私に救助の手をさしのべた方はなんと慈悲深い、

ことでしょう、またあなたに賜わった真実な言葉に

かくも速く従われたあなたもご親切なことです。

(19)

私はあなたのお言葉によって
 ふたたび初志へ戻ることができました。
 さあ、前進です。二人の望みは一つですが、
 あなたは案内者、ご主人、そして先生です」
 私がこういうと彼は歩きだし
 困難なけわしい道を進みはじめた。

(20)

(24) 牝狼の危険は死と等しい。

(25) 至高天。

(26) 歡楽山。

(27) 聖母マリア、聖ルチア、ベアトリチエ。

第三歌

地獄の門と入口。怠惰な者——地獄の河アケロンテと渡し守カロンテ。(怠惰な者は蠅や蜂に刺されながら、裸体で走り廻っている。その足もとには蠅虫が匍い廻りながら、彼らの傷口からでた血や目からでた涙を吸っている)

われを通るものは苦悩の市にいたる、
われを通るものは永遠の苦患にいたる、
われを通るものは絶望の民のもとにいたる、
正義が崇高なわが建設者を動かし
われを神の権力と最高の睿智と
そして最上の愛の象徴とした。

われよりまえに永久以外は創造されたものはなく、
われは永遠に存在するであらう。

われを入れるものは一切の希望を捨てよ。
私は一つの門の頂きにこのような不穏な
色合を帯びた文字が刻まれているのを見た。
そこでいった「先生、この意味はむごいですね」
すると私の心を察した師はいった。

「ここでは一切の恐怖を捨てねばならない。
また一切の怯懦を忘れてしまうのだ。

私たちはさっき私がいった場所へ来たのだ。
そこでは睿智の幸福を失った
苦悩にみちた人々をきみは見るであらう」

それから師はその手を私の手のうえに重ね
微笑を見せ、私の元気をひきたて、

つぎに私に地獄の秘密をしめしたのである。
そこでは歎声や涕泣や悲痛な叫び声などが
星のない大気の中にこだまして

私はそのため最初から涙にくれてしまった。

不思議な言語やおそろしい言葉、

苦悩の言や怒りのひびきなどが、

あるいは高くあるいは低く手で拍つ音に
まじって一大轟音となり、

無限の暗黒の空に鳴りわたる

まるで旋風がおきた時の砂のようである。

昏迷が頭のまわりをめぐるような気がした、

私はいった、「先生、あの聞こえるものは何ですか、

あのように苦んでいる者は誰ですか」

すると師は私に、「あんな哀れな恰好で

悲しい魂のありさまをしめしているのは咎もなく

榮譽もなく世を送った人たちの魂なのだ。

あの中には、神に反抗もせず忠誠でもなく

ただ自分にだけ頼っていた

天使の群もまじっているのだ。

諸天は美が欠けるのを嫌って彼らを拒絶し

地獄の底も他の亡者が功名を誇るのをおそれて

彼らを受けいれないのだ」

私は、「先生、彼らは何をさがっているのです、

彼らをかくもひどく歎かすのはなにですか」

答えていうには、「簡単に答えよう、彼らには

滅我の望みがないのだ。その暗い生活は

第三歌

(1) 有名な地獄の門。この門扉はかつてキリストが地獄へ下った時、悪魔が閉じて、通行を妨けたので破壊されて今はない。

(2) 神の幻影を見る幸福。

(3) 原語は *παράδεισος* であるが、普通の意味の異ったという意味よりも不思議な、奇妙なという意味である。それはそこで用いている言語がわからないという意味でもある。

(4) 亡者たちが絶望のあまり手でからだをうっている音。

(5) かつて一部の天使が神に反抗して戦い、その結果、墮天使として地獄へ墜されたが、戦争のとき両方につかず中立を保った天使もここに罰せられている。

(6) 地獄の底の亡者が悪業をしなかった者も同じ目にあうなら自分たちはただ得たと考えると困るので。

(7) 肉体が滅びた後魂が滅びること。

他のすべての運命を羨んでいる。

世界は彼らの名が記憶に残るのを許さず、また慈悲も正義も彼らを顧みないのだ。

彼らを語るのをやめよう、ただ見て過ぎ給え」

そこで私は見た、すると一旒の旗が

くるくると廻りつつおそろしく早く走るのが見えた。

それは一刻も停るのをがえんじないようだった。

その後からは長蛇の列をした群衆が従っていたが、

その数は非常に多かったので、死がかくも

多くの人を滅ぼしたとは信じられないほどだった。

私は五、六人知った顔を見つけたあとで怯懦ゆえに

大切な地位を辞退した人の影をみて、

それが誰であるかを見てとった。

私はすぐそれを覺り、間違いないかった。

それが神にも、神の敵にも嫌われていた

卑しいものの一団であることが。

これらの生きたことのない卑しい者は、

みな裸体で、そこにいる蠅や蜂のために

はげしい刺激をうけていた。

そのため彼らの顔は血で糊目になり

血は涙とまじりそれを足もとの

けがらわしい蠕虫が吸っていた。

またかたなをながめると、

大きな河の岸辺に群衆の姿が目にとまった。

そこでいった、「先生、今すぐ教えてください

あれは誰で、薄明りの中で見えるように、

いそいそと渡河の準備をしているのは

どんな規定があるのか知りたいのです」

彼は私に、「それらのことは、やがて、

私たちが憂愁の河アケロンテの岸辺で

足をとめるときに明白になるだろう」

私はなにかよけいなことをいったのではないかと

恐れかつ恥じいって、目を伏せて、

河につくまでは話すことをさし控えた。

するとどうだろう、一人の年をとった

白髪の老人が船でこちらへやってきて

叫んでいうには、「悪い魂に偶いあれ、

天を見よう」と望むな。私がやってきたのは

きみたちを向う岸の永遠の闇のなか

灼熱と冷凍のなかへ連れて行くためだ。

そこでまずそこにいる生きている魂よ、

これらの死んだ者たちから離れよ、

しかし私が離れないのを見ていった、

「きみはほかの道、ほかの港から

岸へ渡るのだ、ここから渡ってはならない。

きみを運ぶ船はもっと軽い船だ」

すると案内者は彼に、「カロン、怒るな

思い定めたことを実行できるところで、

このようにきめられたのだ、もう質問するな」

そこでやっと泥沼の船頭の

目の周囲に炎の輪のある

ひげの濃い頬はしずまったのである。

だが見捨てられた裸体の魂たちは

そのような無慈悲な言葉をきくやいなや

顔色をかえ、齒がみをしして

神と親と人類と

その時かれ生まれた場所と時と

その種に対して呪いの言葉を吐いた。

(8) 生き甲斐のある生活をしかつた。

(9) ダンテの彼岸の世界。ことに地獄では生前の善に対応した罰が与えられていた。たとえば怠惰で刺激のない生活をした者には蠅や蜂で刺激を与え、また旗を先頭にして走って無意味な運動をさせられている。

(10) 冥界を流れる河の一つ、『フェネイス』にも現われている。

(11) アケロンテ河の渡し守カロン。古代神話の中の神々の多くは、『神曲』では鬼として取り扱われている。

(12) 浄罪界へ行く船はテグレ河の河口から出帆し、それは天使が動かすから軽い舟といわれている。

(13) 天堂界。ちなみにこの言葉はしばしばくり返される。

(14) その人の祖先。

(9)

(10)

(11)

(12)

それから彼らはひどく泣きながら
神を恐れなかった人 wait っている
禍いの岸辺へ集合しはじめた。

燃える炭火のような目をした鬼カロンは
彼らに注意をあたえ、みんなを舟にのせ、
遅れるものがあれば櫂でうった。

そこで、秋になると木の葉が一枚一枚と
散り、ついに枝は地上にその衣をすっかり
脱ぎすてしまうように、

アダモの悪い種子たちは、指示に従って
つきつぎと、まるで呼ばれた鳥のように
水際におりていった。

このようにかれらは黒い波を越えて去り、
彼岸で彼らが下船するまえに

またこちらの岸では新しい群が集まっていた。

「いいかい」とやさしい師はいった、

「神の怒りのなかで死んだものは、みな
世界各地からここへ集まってくるのだ。」

そしてこの河を渡る準備をする。それは

神の正義が彼らをはげまして、それを恐れさせ
またそれを願わすからなのだ。

善い魂がここから渡ることはない。

カロンはさっきもきみに文句をいったが、

きみはやがてその言葉の意味を覚るであろう」

この言葉が終わるやいなや、暗黒の野原は

はげしく揺れ動き、私を恐怖させたが、それを

いま思いだしてもからだじゅうから汗がにじみでる。

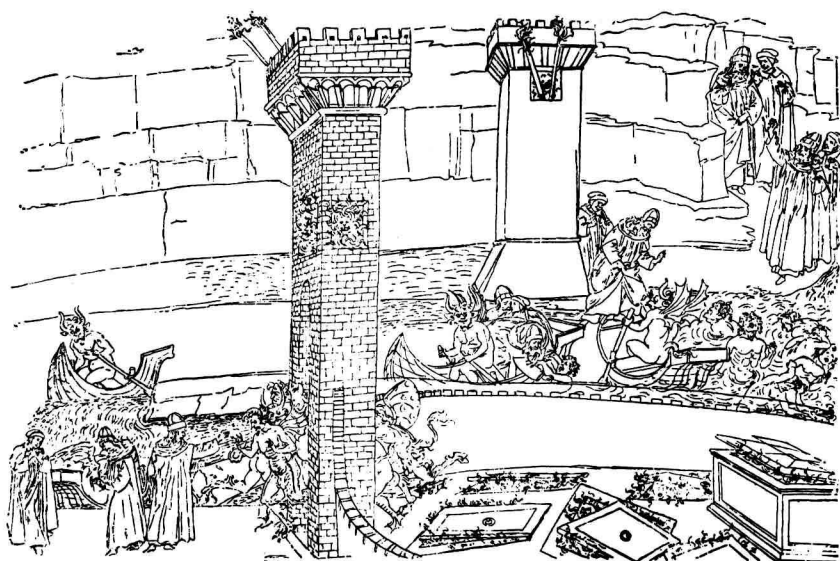
涙にぬれた大地は風をもよおし、
紅の光をひらめかしたが、

(12)

それは私のすべての感覚をうばい、
私は睡眠に襲われた人のように倒れ伏した。

(13)

(15) 人祖アダモ。
(16) 魔匠に招かれた魔のように。



第四歌

第一圈または辺獄^{リシボ}(ここには真実の信仰をもたなかった善良な魂が住んでいる)——高貴な城——彼らは責め苦はないが、神をみたい永遠の願望に悩まされている。

ひどい雷鳴がなりひびいて
頭のなかの深い眠りを破り、

揺らおこされた人のように私は目をさました。

それから休憩をとった目をあたりに動かし
立ちあがって、いま自分がどこにいるのか

知ろうと目をみひらいてよくみると、

不思議なことに私は無限の叫喚をあつめて

雷鳴のようにとどろいている悲歎の淵^{ボウ}の

崖の縁にいるのに気がついたのである。

淵は暗く、深く、そして霧が濃く

目を底のほうへ注いでみたが、

なにも見分けることができなかった。

「さあ、あの盲目の世界へ下ってみよう」

詩人はすっかり蒼ざめてそういった、

「私が先にたち、きみが後に従うのだ」

そこで私は彼の顔色に気づいていった、

「私がこわがるたびに励ましてくださったあなたが
恐れるようでは、どうして私に行けましょう」

すると彼は私に、「この下にいる者の

苦悩にたいする憐れみが私の顔を染めたのを、
きみは恐れているのだと思ったのだね、
さあ行こう、道程は長く、ぐずつてはいられぬ」
こうして深淵をとりまく第一圈に、

彼がまずはいり、そして私をもはいらせた。

そこで聞かえるものは、

永遠の空気をふるわせる

溜息のほかに泣き声ひとつなかった。

それは幼児や女や男たちの

おびたしい大きな群のかもしれない、

責め苦のない苦悩のために生じることだった。

善い師は私に、「きみが見るこれらの魂が

なにかであるか、質問はしないのか、

先に進むまえに知っておいてもらいたい。

彼らは罪を犯さず、功績もあつたが、

それだけでは十分でない。なぜなら、きみが

信じている信仰の門、つまり洗礼を受けなかったか、(美

あるいはキリスト教以前に世にあつて、

十分神を崇めることができなかったからだ。

私自身もそれらの人々の一人なのだ。

他の罪のためではなく、その欠如のために

私たちはここへ堕ちたし、その落度のために

念願のみで希望のない生活をしているのだ」

これをきいたとき、偉大な価値のある者が、

辺獄では賞もなければ罰もなく、宙ぶらりん^③に

されているのを知り、大きな苦悩が私の心をとらえた。

「私に教えてください、先生、教えてください」

すべての迷蒙にうち勝つ信仰を確かめようとして

私は話をはじめた、

第四歌

(1) 地獄。

(2) 物質的な光明も精神的な光明もない世界、つまり地獄。

(3) 原語は^{αἶθερος}であるが、中間に吊られているという意味であるが、ここでは倫理的に解して中間的存在のと訳した。

(4) キリストに救済されているの意味。

話の中でダンテは、ヴィルジリオが異教徒であることを考慮してキリストの名前を明白にいわないが、ヴィルジリオはそれを推測する。

(5) ヴィルジリオの死んだのは紀元前一九年である。

(6) 十字架の印。

(7) キリスト。

(8) ノア。大洪水を免れたヘブライ人の族長(創世記「五・二八」)。

(9) モーゼ。旧約時代にヘブライ人の律法を定めた者(出エジプト記「二」以下)。

(10) アブラハム。旧約時代の偉人(創世記「一・二六以下」)。

(11) ダヴィデ。イスラエルの王(「ルカ」四・二三)。

(12) イスラエル。アブラハムの孫なるヤコブ、天使と相撲して後の名を得た(「創世記」三・二八)。

(13) アブラハムの子イサク。

(14) 「創世記」二九・三二以下参照。

(15) イスラエルはラケルを妻としたため、その父ラバンのもとで十四年間労役に従事した(「創世記」二九・九以下)。

(16) イスラエルの妻ラケル。

(17) 辺獄のなかでも偉人たちのいる所だけからは理性の光がさして辺獄の半分を照らしている。原文では「^{lucis}火とあるが光の意味である」。

(18) ギリシアの詩聖ホメロス(前